

曹洞宗のみで用いられた守持衣

■環付きの守持衣

最近、続々と見出された守持衣を前号で紹介したところ、紐の部分が環になってる守持衣の情報をいただいた。環付きの守持衣は今迄に見たことがなく、まったく予想もしていなかったものである。ほとんどの守持衣は左右の上部の端に紐がついており、その紐を結んで搭けている。しかし、環付きの守持衣は、環が左側すなわち搭けたら後側となる部分についており、それに前の紐を結ぶのである。これは楞嚴寺(兵庫県加東市岡本)に所蔵する。縦四十一・八センチ、横七十三センチで、絹や金襴を綴り合わせた切り交ぜの九条である(図1)。環は直径七センチ、太さは〇・五センチ、白絹の裏布がついており、それに「前永平禪源道印 授与鉄文侍者」と記されている(図2)。禪源が侍者の鉄文に授け

たものと思われるが、楞嚴寺の歴住世代に両者の名はなく、行歴などはまったく明らかにならない。そのため楞嚴寺に所蔵することになった経由も不詳で、それらについては今後の研究課題とし、環付きの守持衣もあつた新しい事実を紹介するのみに留めておきたい。

■逆水洞流の守持衣説

大乘寺(金沢市長坂町)三十八世逆水洞流(一六八六―一七六六)が、当時の守持衣について興味深いことを述べている。それは面山瑞方(一六八三―一七六九)の著わした『得度或問』に対して反論した『得度或問辨儀章』第二巻に、
洞門山主ガタノ内守持衣、タトヘ九条トイヘドモ後頭ノ製様ナク、或ハ紐一筋ナレバ、コレマタ単法衣ノ製様ニシテ、粗門偏袒通肩ニカタヨラザルノ玄旨ニ齟齬セリ。濟下ハ古来ヨリ受用

セザルコトヲ看取スベシ。守持衣ハ義雲師ヨリ始マレリト伝聞ス。齊下洞上ノ緒子ハ、五条トイヘドモ、従上ノ正眼ヲ以テ、偏袒通肩ノ両様ニ通ジテ披在スルユヘニ、前頭後頭ノ超出ノ製様ヲ含畜ス。ユヘニ通肩偏袒ノ口授アリ。枚拳スルニ違マアラズ。シカラバタトヘ山主トイヘドモ、守持衣ニハ緒子ヲ披在セバ好シ。故ニ鷹峯ノ叡祖ハ、現在前二守持衣ヲ受用シ玉ハザルナリ。

といつており、要約すると、曹洞宗の守持衣は永平寺五世雲義禪師(一一五三―一三三三)より始つたといわれ、曹洞宗中興の祖と仰がれる叡祖(一六三六―一七二五)は守持衣を用いず緒子を搭けていたといふ。また、臨済宗ではまったく守持衣を用いていなかったともいつている。

それを証するものに、法衣商の

仕立図がある。京都の老舗の法衣商海老屋に伝わっていた仕立の寸法図をみると、臨済宗には守持衣の寸法図がない。曹洞宗では「修持袈裟」と称して紹介されている(図3)。総裏が切り交ぜになっており、鯨尺で縦一尺三寸五分(五十一・三センチ)、横二尺四寸五分(九十三・一センチ)の七条である。その仕立図には掛絡もあり、縦一尺二寸(四十五・六センチ)、横二尺四寸(九十一・二センチ)で五条になっている。田相部分の縦、横の長さ、修持袈裟と掛絡とは余り変わらないが威儀(禪のこと)のある掛絡と左右両端の紐を結んで搭ける修持袈裟とは搭け方が異なることは明白である。

この仕立図は現在、法衣店の海老竹(京都市中京区富小路三条南入)に所蔵されており、別の仕立図には五条の掛絡と守持衣と思われる七条の「シウツウ衣」も紹介されている。

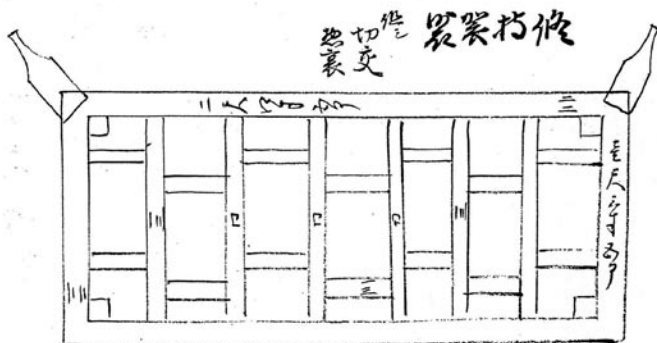


図3 仕立図にある修持袈裟